**白戸　郁之介 （しろと・いくのすけ）**

**１、プロフィール**

衆詩派井上康文に知遇を得、詩誌「詩集」の同人となり、詩を発表。アナーキズムに影響された詩集『日本の胎盤』を刊行する。

＜生没＞

1907（明治40）年11月24日 ～ 1945（昭和20）年５月13日

＜代表作＞

『日本の胎盤』

＜青森との関わり＞

南津軽郡黒石町(現黒石市）に生まれる。「座標」に詩・評論を発表。弘前市で、同人誌「文学ＡＢＣ」を発行する。

**２、作家解説**

詩人。明治40年南津軽郡黒石町（現黒石市）に生まれる。本名鈴木大（まさる）。黒石尋常小学校を経て、弘前中学校に入学。文学芸術を愛好する仲町組の一員となり、弘中短歌会に短歌を出詠、ついで詩作も始める。学業不振のため、大分県中津中学校に転校。昭和３年卒業後、東洋大学に進む。この秋、民衆詩派の一員であった井上康文(詩集社を主宰)を訪問、知遇を得て、詩誌「詩集」の同人となり、同誌に詩を発表。昭和４年７月詩集『日本の胎盤』を詩集社から刊行する。自序で「私の詩は、今こそ、古い生活を古い生活として訣別し、確固とした道程を決定する狼火『日本の胎盤』から焔発する」と自作への自信を記したが、案に相違して、中央詩壇からの反応はなかった。弘前に帰省し、今官一とはかり、須藤均治・木山二郎・井上靖と同人誌を計画、翌５年12月「文学ＡＢＣ」として発行し、短篇小説「感情従来」を掲載。この年文芸総合誌「座標」に詩４編を発表。一戸謙三と詩について論争する。６年「座標」１月号に「十二月詩壇評」を発表。その後、実作から遠ざかり、二度上京し、業界紙記者などを経て、太平洋戦争の末期頃、坂田二郎の紹介で、同盟通信社に入社し、大湊通信部に勤務する。昭和20年５月13日、結核のため死去。38歳であった。詩人としての活躍期間は短かったが、詩集『日本の胎盤』は青森県の詩壇において異彩を放っている。

**３、資料紹介**

〇『日本の胎盤』

図書

1929（昭和４）年７月15日

195mm×140mm

昭和４年７月15日発行。発行所詩集社。序文井上康文。自序。内容は「村落詩篇」･「豚群の踊り」･「来世紀へ生存する我等のリリカ」･散文詩「けだもの」の詩章と「作品備考」からなり、詩39篇収録。集中の代表作「カムチャツカ行の人夫船」は、社会の暗黒を鋭く告発している。